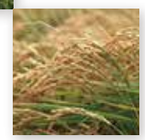
Confidence

北海道の「食」を支える人々。

泥炭地帯の開発など様々な苦労を乗り越え、北海道を代表する農業地帯のひとつになった新篠津農業。その歴史を受け継ぎながら新しい農業にいち早く取り組む、意欲的な農家が多いのも新篠津農業の特徴。そのシンボル的存在のひとつとなっているのがクリーン農業の担い手たち。新篠津農業の歴史と現状、そして今後の方向を、期待の彼らが語り合いました。



新篠津の若手リーダー

農業座談会

泥炭地を豊かな水田地帯に
先人たちが残してくれたもの

早川　新篠津は人口3，300人ほどの小さな村ですが、水稲作付面積が2，470haもある米どころ。道内9番目の規模を誇っています（農林水産省2014年統計データより）。

大塚　ここに至るまでには、先人たちの血のにじむような努力がありましたよね。昔の新篠津は分厚い泥炭層が一面に広がっていて、場所によっては厚さが7mもあったという記録が残っています。現在の新篠津からはとても想像できないですけど。

中村　泥炭地は本当に厄介だったそうですね。水分が多くて、腰まで埋まりながら田植えをしている様子を記録映像で見たことがありますよ。

大塚　しかも、堆積する植物の残体が硬くて鍬が入らないなど、まさに農民泣かせの土地。しかし、終戦直後の食糧難を解決するため、米の増産を政府が打ち出したのをきっかけに、1955（昭和30）年、泥炭地開発事業が始まったんですよね。

早川　泥炭地を耕作地にするには他から良い土を持ってこなければならないので、運河や山から削った土を1万ha以上の田畑に運んだそうです。そして16年という歳月を経て、美しい水田地帯が完成しました。

福尾　粘り強い精神を肥沃な土地と、組織の強さからとても感じますね。

中村　先人たちが築き上げたものは、まさにこの村の財産。そういう農業基盤があるから、有機農業や「EM自然農法」をやれるわけだし。

早川　新篠津の土地の奥深くには今なお泥炭層があって、そこはいわば有機物の宝庫。活性肥料を使う農業にとっては障害であっても、「EM自然農法」や有機農業をしている僕らにとっては理想的な土地ですからね。

中村　例えるなら、肥料の上に農作物を作っているようなもの（笑）。地力の高さを考えたら、これ以上のものはないと言えますね。

心から売りたいものを作る
熱き思いが発展への原動力

中村　福尾くんは何がきっかけで農業を始めようと思ったの？

福尾　僕はもともと青年海外協力隊に入りたくて、調べたら、当時は農業のボランティア募集が多かったんです。それで農業の勉強をしようと、東京農業大学に入学しました。

中村　だから、大根なの？

福尾　いいえ（笑）、たまたまご縁があって。で、大学で勉強していくうちに農家は何でも一人で出来てカッコいいなと。自然の中で一生懸命働きたいと思うようになって、農業法人の合同採用説明会・北海道ファーマーズフェアに参加しました。そこで大塚さんが代表を務める「オーガニック新篠津」と出合ったんです。

大塚　僕が面接しました（笑）。

福尾　大塚さんに「きついよ」と言われたのを覚えています。農業は自然環境と人間環境の両方のバランス感覚が必要な難しい産業だと常々感じていたので、その言葉にとても共感して入社を決めました。

大塚　農業は「きつい」と言われて、「それでも」という人じゃないと勤まらない。何せ失敗と困難の連続だから。

中村　自然を相手にした経済活動なので、毎日コントロールできないものとの格闘でもありますからね。

早川　大塚さんも僕も入植100年を超える農家。代を重ねていくごとに土地を守らなきゃ、後継者を育てなきゃという責任も重くなりますし。

福尾　それでも長年にわたり続けられていて、なおかつ成長し続けている原動力は何ですか？

大塚　たぶん、ここにいるみんなは、情熱があるのかなと思います。

早川　いいものを作ろうというのはもちろん、農業をちゃんとした産業にしようという情熱ですよね。

大塚　そうです。つまりは利益を追求しているということ。そのためには、これを作ったら国から補助金がもらえるといった埋め草的な農業ではダメなんです。安全・安心で美味しいという生産責任を果たし、心から売りたいものを作る。それが結果として成長につながっているのかな。

早川　もちろん成果としても表れていて、大塚さんのところはトマト甲子園三連覇とか、いろいろな賞をとっていますよね。この10年で本当に伸びたなと感心しています。

中村　2015年ゆめぴりか食味コンテストで新篠津農協が2位とかね。

早川　あれは米農家にとって自信につながる出来事でしたね。でも、それに驕ることなくなぜ2位になったのか分析しているところです。その結果が今後の新篠津を支える戦略になると思っています。

農業過渡期を乗り切るため
ファーマーたちの挑戦は続く

大塚　先人たちが築いた豊かな土地、作り手の情熱のほかにも、新篠津の農業にはまだまだ魅力があります。

中村　一つは札幌に近いこと。おかげで食料供給基地としての優位性が他地域よりも非常に高いです。

大塚　それと、北海道に300軒しかない有機農家のうち、20軒以上が新篠津というのも特徴ですよね。

早川　そうですね。そもそも農協が先頭に立って有機農業などを謳っている村は、見たことがありません。有機農業などに興味がない人たちも、減農薬・減化学肥料でもうまくいく様子を目の当たりにしているから、農薬などは少なくていいという考え方が浸透しています。そういう点でも、他地域とは違う農業の村になりつつあるのかなと思いますね。

福尾　まさに農業を行うのにってつけ。どこも優良地だから遊休農地がなく、本来なら僕のような新規就農者は入りづらいです。しかし独立とともに運よく土地を手に入れられ、皆さんとともに農業に携わっている。心から誇りに思っています。

早川　とはいえ、農家戸数の減少やTPPによる外資参入の危惧など、将来に対する不安はありますよね。

中村　そういった情勢の中で生き残る方法を考えたとき、やはり村内で結束して、みんなで幸せになる術を考えなければいけないと思いました。

早川　同感です。

中村　新篠津は50％が米農家です。まずは米で実効性のある策を打たなければならないかなと。そのためにも、先ほどの早川さんの話にもあったように、ゆめぴりかの良食味の分析はぜひ続けてもらいたいです。

早川　そして、日本の方々に国産を食べてもらうために、これまで同様、安全・安心を売るしかないかなとも。

中村　そうですね。国内で買い支えてくれれば、その国の農家は必ず生き残ります。そのためには新篠津からの情報発信も重要でしょうね。

大塚　自分たちの頑張りをたくさんの人に見てもらうことは、とても大切。特にこれからは女性への発信がキーですね。僕らのお客様の99％は女性。農業に興味のある農業女子も増えていて、弊社にも4人の女性スタッフがいます。今後、女性目線による商品やサービスの提供など、新しい購買動機につながるアイデアが出てくるのを楽しみにしています。

福尾　僕は一日も早く皆さんと肩を並べられるよう、一流の農家になるのが当面の目標です。

早川　福尾くんや中村さんのようなIターン就農者も新篠津の財産。村外出身でも成功するということを実証してくれれば、今後も村に新しい風が入り続けてくれるので、ぜひとも頑張ってもらいたいです。そして、軌道に乗ったらどんどん東京に進出してほしい。いかに北海道のものを移出して、東京からお金を持ってくるかも生き残りの鍵。期待しています。

中村　「ウォーム・ハート、クール・ヘッド」。熱い心と冷静な思考。この言葉を座右の銘にして、これからも努力していこうと思っています。

福尾ファーム 代表
福尾 拓さん
札幌市出身。東京農業大学を卒業後、オーガニック新篠津に就職。平成26年より独立し、有機大根の栽培を開始する。

新篠津つちから農場株式会社 代表取締役
新篠津つちから販売株式会社 取締役
中村 好伸さん
札幌市出身。サラリーマンを経て、37歳のときに就農を決意。佐藤農産にて研修後、平成20年に法人代表に就任。玉ねぎの有機・特別栽培を行う。

有限会社大塚ファーム 代表取締役
株式会社オーガニック新篠津 代表
大塚 裕樹さん
大正2年入植の4代目。ミニトマト、ミズナなどを有機農法で栽培。平成25年より生産・加工・販売を行う（株）オーガニック新篠津の代表に就任。

早川農場 代表
早川 仁史さん
明治34年入植の4代目。メロンの連作障害対策として平成5年より微生物を活用した「EM自然農法」を導入。平成13年に有機JAS認定を取得。